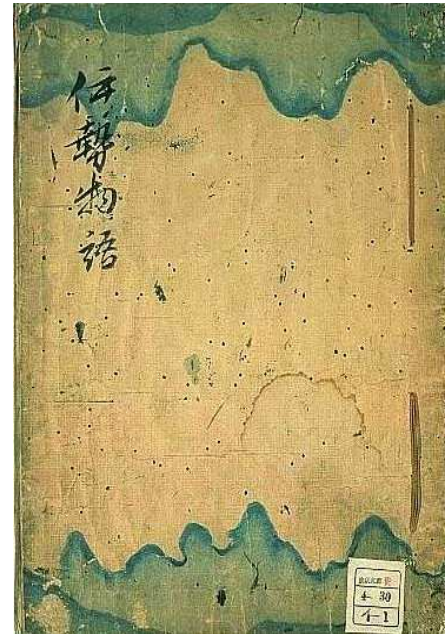
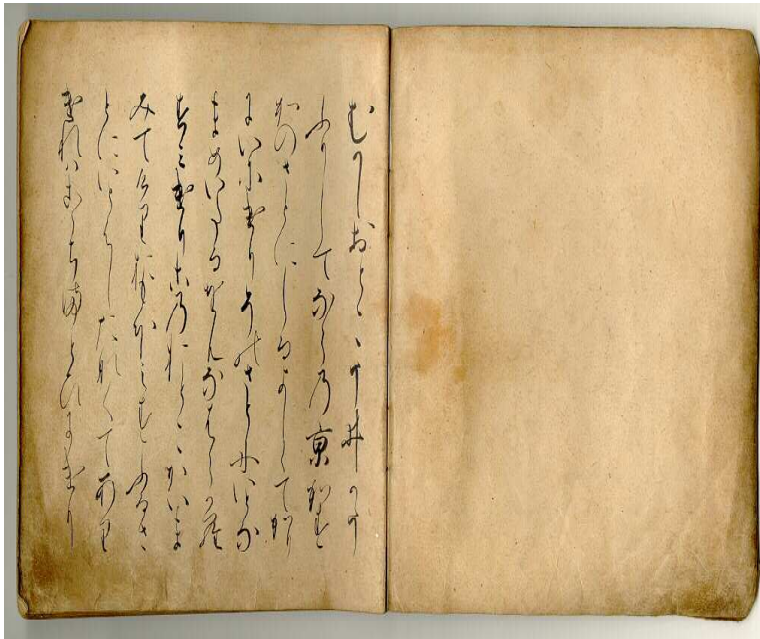


天草方言で読む【伊勢物語】

鶴田 功〈訳文〉



伊 勢 物 語

平安初期、在原業平の自叙伝ともいわれている歌物語

初段 「^{ういこうぶり}初冠」

〈原文〉

むかし、をとこ、^{ういこうぶり}初冠して、平城の京、春日の里にしるよしして、狩に住にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このをとこ、かいまみてけり。おもほえず ふるさとに、いと ^{かりぎぬ}はしたなくて ありければ、心地まどひにけり。

をとこの着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。そのをとこ、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

春日野の 若紫の すり衣 しのぶの乱れ かぎり知られず
となむ、をひつぎていひやりける。ついで、おもしろきことともや思ひけむ。

みちのくの しnoぶもじすり 誰ゆゑに 乱れそめにし われならなくに
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かく、いちはやきみやびをなむしける。

〈意訳〉

昔、男が初めて五位の官位^{か い ま み}バ貰うたある日ンこと、今は古都になった奈良の都、春日の里に領地がある縁故で、鷹狩りに出掛けられました。その里に、どもこも綺麗か姉妹が住んどりました。男は、その女たちバ、垣間見（覗き）しよりました。

思い掛けものう、こがんさびれた廃都に、似ても似つかんよか女ゴン姉妹が居るもんだけん、何ともそぐわん気ので、男心が迷うてしもた。

男が着とる、狩着ン裾バ切り取って、それに歌を書ゃーて渡たさした。その男は、^{しのぶすり}葱摺の狩着バ着とらした。

（この、春日野の若紫、その紫ノ根摺り衣じゃなかばって、^{しのぶすり}葱摺の模様がこがん乱る

るごて、私ン心は、貴女バ思い偲ぶ気持ちで、大層乱れ切っとりますと)

ちゅう、一首バ、追い掛けざまに渡したわけ…。

若紫の摺り衣と、狩衣の葱摺しのぶすりとん取り合わせは、ちょうどこがんだ機会に相應ふさわしか、風流じゃ、ちゅうて思わしたっじゃろもん。と言うのも、河原左大臣の

みちのくの 伸夫もち摺り 誰ゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに
(陸奥の伸夫の里の葱しのぶじゃなかばって、私の心は、葱もじ摺りの乱れ模様のごて、乱れきつとる。誰がために乱れ染めた私じゃいろ…みんなあなたのせいですバイ)ちゅう、歌の趣バ取ったっじゃろだ。昔の若者たちや、こがんだ乱暴な風流もしたもんじゃった。

二段 「西の京の女」

〈原文〉

昔、男ありけり。ならの京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人には、まされりけり。その人、かたりよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのまめ男うち物語らひて帰り来て、いかが思ひけむ、時はやよひのついたり雨そほ降るにやりける。

起きもせず 寝もせで夜を あかしては 春のものとして ながめ暮らしつ

〈意訳〉

昔、一人の男がおんなした。

奈良の京はお引き移りになり、新しか平安京は、人の住む家もまだ落着いとらんじゃった頃、西の京に一人の女御おなごが居らした。その女は、世間にも稀に見るよか女御おなごじゃった。いや、容貌よりかその心根や品位の優れた人は、二人とおらんじゃった。

ところが、この女御おなごは人妻ちゅうだけじゃのうして、他に通う男もあったそうにある。その女御おなごバ心から思い詰めていた男が、わーが思い通りに語りおうて帰ってきて、さて、何バ思うたっじゃいろ、時は旧暦3の上旬、折からの春雨がしょぼしょぼ降りしきる最中、後朝きぬぎぬ(一夜を共に寝た翌朝)の歌バ詠んで贈りました。

起きもせず 寝もせで 夜を明かしては 春のものとして 眺め暮らしつ

(お別れして帰って来ましたばって、思い乱るるまま、起きとっとじゃいろ、寝とっとじゃいろわからん、切なか一夜バ明かしました。明けてみたりゃ、折からの時候のつきもんで、そぼ降る春の長雨に一日ぼんやり眺めとっとですヨ)

三段 「ひじきもの」

〈原文〉

昔、男ありけり。懸想けそうしける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらば むぐらの宿に 寝もしなむ ひじきものには 袖をしつつも
二条の後の、まだ帝にも仕うまつり賜はで、ただ人にておはしましける時のことなり。

〈意訳〉

その昔、一人の男がおんなした。

想うとる女のもとに「ひじき藻」とかいう品物ば贈るついでに、こがんだ歌を詠うだ。

あんたにもしも私を愛しく想う気持ちがあったら、荒れ果てて貧しか私の家にでも訪ねて来てくださって、共寝の幸ば味わうこともできるでしょうばってん。立派な敷物はなかばって、衣の袖ば二人分敷き連ねて敷いて布団にして、その上に二人で寝る、ちいう感じにはなりますばってか。

二条の後が、まだ天皇陛下の御側にお仕えする前の、皇室外の一般人じゃらした当時の話てですたい。

四段 「西の対の女」

〈原文〉

むかし、東の五条に^{おほきさい}大后の宮おはしましける、西の^{たい}対に住む人ありけり。それを^{ほ い}本意にはあらで心ざしふかかりける人、行きとぶらひけるを、^{むつき}正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。

ありどころは聞けど、人の行き通ふ所にもあらざりければ、猶憂しと思ひつつなんありける。又の年の^{むつき}正月に、むめの花ざかりに、こそを恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見れど、こそに似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷きに月のかたぶくまでふせりて、こそを思ひ出でてよめる。

月やあらぬ 春や昔の春ならぬ わが身ひとつは もとの身にして
とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

〈意識〉

昔、東の京の五条の町に皇太后宮がおんなす御殿の西の対にある屋敷に、一人の姫が住んどんなした。

そりば、ある男が、始めはそれほど思い入ったわけでもなく、ただ行き通うとるばかりじゃったが、通うとるうちに、男の気持ちが段々と深刻になりました。

ちょうど、^{むつき}睦月（旧暦の正月）の十日時分でした。娘は急に他ン処れ、身バ隠してしまわした。

姫の居所は、聞き及んどったばって、そこにゃ、人が尋ねて行かるる所でもなかったけん、男は情けなかとは思いながらも、悶々とした日バ暮らしとりました。

その明くる年の睦月に、ちょうど梅の花盛りじゃったばって、去年の今時分に、女に逢うたことば思い出ゃーて、例の五条院の西の対にある屋敷に出かけて、立っちゃ見、座っちゃ見、色々してみらしたばってか、どうも去年の面影に似た気持ゃわいてこん。つい、泣き濡れて、荒れ果てたあばら屋の板敷きの上で、月が西に傾く頃まで嘆き臥して、ありし去年のことば思い焦がれながら、一首口ずさましたっじゃった。

（月は昔の月じゃなかっじゃろうか、春は昔ンままの春じゃなかっじゃろうか…いや、月も春も昔のままだ…処が、自分の身だけは昔のままでありながら、あん人バ失ってしまった今の境遇じゃ、もうすっかり変わり果ててしもうたわい）
と、詠んで、ほのぼのの夜が明くるころ泣きながら帰ったことじゃった。

五段 「築地のくすれ」

〈原文〉

むかし、をとこありけり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童への踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじききつけて、その通ひ路に、夜ごと人をすゑてまもらせければ、いけどもえ逢はで帰りけり。さてよめる。

人知れぬ わが通ひ路の 関守は よひよひごとに うちも寝ななむ
とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆるしてけり。

二条の後に忍びてまゐりけるを、世の聞こえありければ、せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ。

〈意訳〉

昔、一人の男がおんなした。東の京の五条あたりに住んだる女のもとに、密かに通うとった。人目を避けて通うところじゃったけん、門から入ることもできんで、子ども達の踏み開けた土塀の崩れた穴から通うた。そこは、家の人目も多くはなかったばって、通うことが度重なったけん、その家の主人が聞きつけて、その通路に毎夜番人ば置いて、番をさせたけん、男は行たても女に会えんで、空しく帰ってしもうた。そこで詠んだ歌、

（人に知られんごて、こっそりと通とっとじゃけん、道の番人は二人の間を邪魔しないで、毎晩毎晩、ぐっすり寝込んでしもうて欲しか。愛しい彼女に会えるけん…）
と詠んだけん、女は男がこがん苦労しとるのかて思って、全くひどう心ば痛めた。

そこで、女の悩むさまば憐れんで、その家の主人は二人が会うことを許したのじゃった。

これは、二条の後のもとに、人目を忍んで参上しておったとば、世間の評判というものがあつたけん、後の兄君達が、人々に守らせなさったちいうことである。

六段 「芥川」

〈原文〉

むかし、をとこありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上におきたりける露を「かれは何ぞ」となん問ひたりける。行く先多く夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、をとこ、弓箒を負ひて戸口に居り。はや夜も明けなんと思ひつつあたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」と言ひけれど、神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か なにぞと人の 問ひしとき 露と答へて 消えなましものを

これは、二条の後のいとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてみ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御せうと、堀河の大臣（おとど）、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるをききつけて、とどめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

〈意識〉

昔、一人の男がおんなした

高貴なお方で、とても逢うてくれそうにもなか女性バ、長年、求婚してやっと盗み出ゃ一て、真っ暗闇の晩に連れ出さした。

芥川ちゅう川ンほとりバ通りかかった時、草の上に光っとる露バ見て、「ありゃ何ネ」ちゅて、男に訊ねらした。

落ち行く先はまだ遥かに遠か、夜はふけ雨は降るし、雷まで鳴るもんじゃけん、荒れ果てた粗末な蔵に女性バ押込み、男は弓矢バもって戸口に見張っとった。ところが、そこが鬼の棲家^{すみか}ちゅうは知らんじゃった。早よ夜が明けんかねて思うとる間に、鬼はもうとっくに女性バ食てしもとった。男は雷ン音で、女性の悲鳴も聞こえんじゃった。

よようして夜が明けてきたけん、中バ見たばって女性がおらん。悔しがって地団太踏んで泣ゃ一たばって、もうどうにもならん。

（草葉の露に「ありゃ何ネ」ちゅて、女が訊ねた。そん露が消えたごて、お互いに消え失せれば、こがん憂き目バ見んちゃよかったろばってネ、…あん雷の音で気付かんじゃったことが悔まれてのさん）

これは、二条の后が、いどこにあたる女御のお側にお仕え申し上げるごたる風にしておんなしたっじゃばって、容貌がなんさま美しゅうあんなさったけん、（男が）盗うでかるうて逃げ出したとば、

（二条の後の）兄君の堀川の大臣と、太郎国経の大納言が、まだ身分の低っか頃じゃったばって、宮中に参上される時に、ひどう泣く人があっとば聞きつけて、車ばとめて（二条の后を）取り返されたそうなもん。

そりば、こがんふうに鬼というとじゃった。

（この話は二条の后が）まだたいそう若うして、臣下の身分でいらっしゃった時のことじゃったそうなもん。

七段 「かへる波」

〈原文〉

昔、男ありけり。京にありわびて東に行きけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、波のいと白く立つを見て、

いとどしく 過ぎゆく方の恋しきに うらやましくも かへる浪かな
となむよめりける。

〈意識〉

その昔、一人の男がおんなした。

京の都では思うごてならん身ば持て余して、東国へ向うて、伊勢、尾張の間の海辺ば行った時、波頭が真っ白うに泡立つ様子ば見て、

（都落ちして東へ向かう自分には、ただでさえ、過ぎ去りし日々、過ぎ来し場所が、恋しゅうしてたまらんとに。あの波を見ていると羨ましがまた募ってしまうばい。
ああ、波はよかなあ、沖さね行たても必ず浜辺さん返って来っとじゃもねなあ。

自分もあやかりたかよ、ちゃんと京都に帰るればよかばってなあ)
と詠んだったあ。

八段 「浅間の獄」

〈原文〉

昔、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきて、すみ所もとむとて、ともとする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の獄に煙の立つを見て、
信濃なる 浅間の獄に 立つけぶり をちこち人の 見やはとがめぬ

〈意識〉

その昔、一人の男がおんなした。

京都には身を置き辛い事情でもあったっじゃろうか、東国へ行たて自らの住み処ば求め
ゅうとして、仲間ば一人・二人連れて行たっじゃった。

信濃の国の浅間岳に煙が立つ様子ば見て、次のような歌ば詠んだ。

(信濃の国の浅間岳に煙が立っとる様子を、あちこち大勢の人々は見て気付くと
じゃろうか。身ば持ち崩して都落ちする自分たち一行ばみて、怪しがる人たちが、
どこかにおりゃせんじゃろうかにゃ)

九段 「東下り」 八つ橋

〈原文〉

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、あづ
まの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけ
り。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。

そこを八橋といいひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてな
む八橋といひける。その沢のほとりの水の蔭に下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかき
つばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五
文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ
とよめりければ、皆人乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。

〈意識〉

昔、ある男がおんなした。

その男が、もう都は飽や一た、東ン方に安住しゅうち思うて、昔からの友達とつんのう
で旅立たした。道も知らず不案内のままに三河の国、八橋ちゅうところに着いた。

そん沢にかきつばたが咲やーとった。そりば見てある人が「かきつばた、という5文
字バ句の上に据えて、旅情の侘しさバ、詠うでみろい」ちゅうた。そこで詠んだ歌、

(唐絹は何べんでん着て、よれよれになる褌じゃなかばって、長年慣れ睦んだ妻が、
都にはおるこっじゃけん、そん唐絹バ張っては着、張っては着るちゅう。ごて
そん、はるばる遠くからやって来た長んか旅路バ、しみじみと哀れに思うちゅう
こっですたい)

ちゅて詠うだりゃ、居合わせた誰も彼もが、乾し飯ン上に涙バ落として 餓 のふやけて

しもたっですばい。

九段 「東下り」 駿河の国

〈原文〉

行き行きて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかへでは茂り、もの心ぼそく、すすろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

駿河なる 宇津の山への うつつにも 夢にも人に あはぬなりけり

富士の山を見れば、皐月さつきのつごもりに、雪いと白う降りり。

時知らぬ 山は富士の嶺ね いつとてか 鹿の子まだらに 雪のふるらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは塩尻のやうになんありける。

〈意訳〉

どんどん下って行たて、駿河の国に着いた。その宇津山にまで行たて、自分が入ろうとする山道は、ひどく暗うして、細か上に、蔦や楓がうっそうと茂って、何となく心細うして、思いがけずひどか目に合いそうだと思うと、修行者がこっちゃん来らすとに出会った。「あなたほどの方が、どいこがん寂しか道ばおいでになっとですか」という言葉を聞いて、よく見れば、かつて都で会ったことのある人でじゃった。そこで、都にいる愛しかお方のもとにというわけで、手紙ば書いて託した。

（都ば離れて、駿河の国にある宇津の山べに来かかっておりますが、その山の名のごて、遠く離れておるけん、現実にも会えんし、夢でも、あなたに会わんとですよ。富士山を仰ぎ見れば、五月の末（今の七月中旬）じゃが、雪が真っ白に積もっとる。時節も心得ん山は、富士の嶺だ。一体、今はいつだと思うて鹿の子まだらの模様のごて雪が降とっととゾウ）

そん山は、都でたとえれば、比叡山ば二十ばかり積み重ねたごたる高さで、形は塩尻のごたった。

九段 「東下り」 都鳥

〈原文〉

猶、行き行きて、武蔵の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれみて思ひやればかぎりなくとほくも来にけるかなと

わびあへるに、渡し守、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」といふに、
乗りて渡らんとするに、皆人わびしくて、京に思ふ人なきにしもあ
らず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚の赤き、嶋の大きさなる、水
のうへに遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。
渡し守に問ひければ、「これなん宮こどり」といふをききて、

名にし負はば いざ事とはむ 宮こ鳥

思ふ人は ありやなしやと

とよめりければ、舟こそりて泣きにけり。



〈意訳〉

更に、東さん^{しもふさ}とどんどん進んで行たて、武蔵の国と下総の国の境に、どもこも大きか河
があった。その河は隅田川ち言う。その大河の岸边に一同は腰を下ろして来た方角は振
り返りながら、えらい遠さん来たもんバイと、互いに嘆きおうとったりや、渡し守が「早
よう舟に乗れ。日の暮れっしまう」と^せ急きたてて言うけん、舟に乗って渡ろうてすると、
一行の者は、何となく悲しか思いにつつまれた。それぞれ都に、恋しゅう思う人がおら
んわけじゃなか。ちょうど都を恋しがとったりや、白い鳥で、くちばしと脚が赤っか、
嶋の大きさぐりゃあの鳥が、流れの上に浮かびながら魚ば食べよる。都では見かけん鳥
だけん、誰も知っとる者なおらん。そこで、渡し守に尋ねたりや、「こりが、都鳥じゃ
っかい」と答えたとは聞いて、

（都という名前ば持とっとなろば、あろ尋ねてみゅうかい。私の愛しい人は、達
者うしとらすどかい）

ちゅうて、思いば込めて詠んだけん、舟中の皆が、泣ゃあてしもうた。

十段 「たのむの雁」

〈原文〉

むかし、男、武蔵の国まで惑ひありきけり。さて、その国にある女を、よばひけり。
父は異人にあはせむと言ひけるを、母なむ貴（あて）なる人に心つけたりける。
父はなお人にて、母なむ藤原なりける。さてなむ、貴なる人^{こほり}にと思ひける。この婿がね
によみておこせたりける。住むところなむ、入間の郡、みよし野の里なりける。

みよし野の たのむの雁^{かり}も ひたぶるに 君がかたにぞ よると鳴くなる
婿がね、返し、

わが方に よると鳴くなる みよし野の たのむの雁を いつか忘れむ
となむ。人の国にても、なほ、かかることなむやまざりける。

〈意訳〉

昔、男が武蔵の国まであてものうさ迷い歩いていた。そして、その国に住んだる女の
もとに夜這いして情を交わしとった。

（女の）父親は、他の男と嫁がせようと言うたが、母親は身分の高か人に（嫁がせよう）
と心がけとった。

父親は普通の身分の出じゃったばって、母親は藤原氏の出であった。だけん、身分の高

い人と思うたと。

（母親は）こん婿にしようちゅて考えていた男に、歌を詠んで贈った。（この親子の）住んでいるところは、入間郡三芳野の里じゃった。

（三芳野の田の面におりている雁も、ただ一途に貴方の方に慕い寄るちゅて鳴いとるごて聞えます）

婿にと思った男の返歌は、

（私の方に慕い寄ると言うて鳴いとる三芳野の田の面の雁ばいつ忘れることがありまっしょうかい。いいえ、忘れることなどござっせん）

と詠んだ。

他郷にいても、やはり、こがんふうな風流なことは頻繁にござした。

十四段 「姉波^{あねは}の松」

〈原文〉

むかし 男 みちの国にすすろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、切に思へる心なむありける。さて かの女、

なかなか 恋に死なずは 桑子にぞ、なるべかりける 玉の緒ばかり。

歌さへそひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけむ いきて寝にけり。夜深く出でにければ女、

夜も明けば きつにはめなで くたかけの まだきに鳴きて せなをやりつる
といへるに、男「京へなむまかる」とて、栗原の姉波^{あねは}の松の人ならば、都のつとにいざ
といはましをといへりければ、よろこぼひて「思ひけらし」とぞいひをりける

〈意訳〉

昔 男があてどもなく彷徨^{さまよひ}い、陸奥の国（奥州）に辿り着いた。そこに住む田舎女が、この京男バ珍っしゃ、慕いじゃーて、そっこん惚^ほれくうでしもた。

（なまじっか、焦がるる心のために恋死にする位なろば、いっそんなて、こん無心に桑バ食うとる蚕になればよかったろで、仮に玉の緒ほどの（ほんの暫くの）間でちゃ、よかつじゃってま）

女は朴訥な人柄じゃったが歌まで田舎臭かった。そっでも男はさすがにまんざらでもなかごたるふうで、女バ訪ねて共に一夜バ明かさした。

男は、まだ夜の明けん内に退散したもんじゃって、女は、てっきり、鶏が夜鳴きしたせいで思うたっじゃろもん。

（夜の明けたろば、どうでんこうでん水槽にぶち込むでくるる。こん虚^{うつ}け鶏めが、時ならん時、鳴きよってからに、見てみろ、せっかく私ン大事な人が帰ってしもうたじゃっか。バーカ）

ちゅて、詠^ようた。男は「そっじゃあろば」ちゅえば、

栗原の姉波^{あねは}の松が人間なろば、都の土産に「どうぞ一緒に」て言おうばって、あんたはこの地を離れられん姉波^{あねは}の松と同じで、残念バイ。と詠んだところが、女は勘違いして「あん人は私に惚^ほれとったつヨ」ちゅて言いよったてたい。

二十三段 「筒井筒」

〈原文〉

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりければ、をとこも女も恥かはしてありけれど、をとこはこの女をこそ得めと思ふ。女はこのをとこをと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむありける。さて、この隣の男のもとよりかくなむ。

筒井つの 井筒にかけし まろがたけ 過ぎにけらしな 妹見ざるまに
女、返し、

くらべこし 振り分け髪も 肩過ぎぬ 君ならずして 誰かあぐべき
などいひて、つひに本意のごとくにあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、かふちの国、高安の郡に、行き通ふところ出で来にけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなく、出だしやりければ、をとこ、異心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁の中にかくれみて、かふちへいぬる顔にて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、

風吹けば 沖つ白波 たつた山 夜半にや君が ひとりこゆらむ
とよみけるとききて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかすなりにけり。

まれまれかの高安に来てみれば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて手づからいひがひとりて、笥子のうつは物に盛りけるを見て、心うがりていかすなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり 見つつを居らむ 生駒山 雲なかくしそ 雨は降るとも
といひて見いだすに、からうじて大和人来むといへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと いひし夜ごとに 過ぎぬれば 頼まぬものの 恋ひつつぞふる
といひけれど、をとこ住まずなりにけり。

〈意訳〉

昔、田舎まわりの行商ばしていた人の子どもたちが、共同井戸のまわりに来ては仲良う遊んどったが、やがて年ごろになったりゃ、男も女も互いに照れて、ろくに会わでにゃおったばって、男は、是非ともこの女を妻にしたかて思うた。女はこの男ば夫にと思ひながら、親が適当な人と結婚させようとしたばって、耳を傾けようとせんで暮らしていた。そうこうするうちに、この女の隣の男から、次のような歌を詠んで寄越した。

（子どもの頃、筒井の井戸杵と背比べをした私の背丈も、大人となって井筒を越えたごたる。あなたと久しく会わないでいるうちに）
女は、次のような返事をした。

（互いに比べてきた振り分け髪も、肩を過ぎるぐらいになりました。あなた以外に誰が一体この黒髪を結い上げて、一人前の女にしてくれらすでしょうか）
など、互いに歌をやりとりして、とうとう、かねてからの思いのとおり二人は結婚したのであった。

それから数年して、女は親を亡くし、生活のよるべがなかごてなったので、男は、女とともにみすぼらしか状態でおらりゅうかて思うて、行商に出ているうちに、河内の国高安郡に、通っていく女が出来たっじゃった。

そりばってん、この以前からの妻は、嫉妬する様子もなか、素直に河内へ行かせるけん、男は他に思う男が出来て、こがんで素直に出してくるっとじゃろうと疑わしう思つて、庭の植え込みの中に隠れていると、この女は、何様綺麗に化粧して、物思いがちに外ばみつめて、

（風が吹けば沖の白波が立つち言う竜田山を、真夜中に愛しかあの人へ越えて行かすとじゃろかい）

と歌を詠んだとば聞いて、この上なく愛しいと思うて、河内の国へも通うて行かなくなつてしもうた。

男は時折、あの高安の女の所に来てみると、なれそめた頃は奥ゆかしうとりつくろつておつたが、時が経つにつれて、今は全く氣ば許して、自分でしゃもじを取つて、大きな飯椀に盛りよつとば見て、嫌氣がさして通わなくなつてしもうた。そういうわけで、高安の女は、男のいる大和の方を見て、

（あなたのおんなさる方なりとも、まあ眺めておりました。だから雲よ、生駒山をどうぞ隠さんで欲しか、たとえ雨が降つても）

と切ない胸中ば詠んで、外を見ているうちに、やつのことで大和の男から「そのうち、行こう」と言つてきた。女は喜んで待つとつたが、そのたびに通り過ぎてしもうたけん女は、

（あなたが来るち言うた夜ごとに、あっちゃんはってかしたけん、もうあてにはならんと思ひながら、やっぱり恋ひ慕う日々ば送っております）

と哀れなことを詠んだばつて、男は通うて来なくなつてしもうた。

二十四段 「梓弓」

〈原文〉

むかし、をとこ、片田舎にすみけり。をとこ、宮仕へしにとて、別れをしみてゆきけるまゝに、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵、あはむ」とちぎりたりけるに、このをとこ来たりけり。「この戸あけたまへ」とたたきけれど、あけて、歌をなむよみて出だしたりける。

あらたまの 年の三年を 待ちわびて ただ今宵こそ にひまくらすれ
といひいだしたりければ、

梓弓 ま弓槻弓 年をへて わがせしがとと うるはしみせよ
といひて、去なむとしければ、女、

梓弓 引けど引かねど 昔より 心は君に よりにしものを
といひけれど、をとこかへりにけり。女、いとかなしくて、しりにたちてをひゆけど、えをひつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつけける。

あひ思はで かれぬる人を とどめかね わが身は今ぞ 消え果てぬめる
と書いて、そこにいたづらになりけり。

〈意識〉

昔、ある男がさる女と片田舎に住んだ。男は宮仕えをするち言うて、別れを惜しんで京に行たま、三年も帰って来んじゃったけん、女はどもこも待ちくだびれとったところが、何様親切に言い寄ってきた男と、「今夜、結婚しゅう」と言い交わした。ちょうどそん折、この男が帰ってきたたい。男は「この戸を開けっくれい」と戸を叩いたばって、女は開けでにゃ歌だけば詠んで差し出ゃあた。

（三年もの長い間、あなたを待ちくだびれて、ちょうど今夜、他の男と結婚することになっとるのよ）

と家の中から言うて歌をやったもんだけん、男は、

（弓にも数々あるごて、数々の年月ば、私があなたを愛してきたごて、今度の相手と仲睦まじく暮らしてれ）

とち言うて、立ち去ろうとしたりゃ、女は、

（あなたが私を愛してくれようとくれまいと構いませんばってん。私は、ただ一途にあなたに心を寄せてきたっですばい）

とち言うて引き止めたばってか、男は帰ってしもうた。女はどもこも悲しうなって、男の後ば追いかけて行ったばって、どがんしても追いつききらんで、清水のある所に倒れ伏してしもうた。そこにあった岩に、指の血で歌ば書きつけた。

（こがんも思っとるのに、私を思ってもくれんで、離れさっていく愛しい人ば、引き止めきらんで、悲しさのあまり私の身は、今にもぼろぼろになって消えてしまいそうヨ）

て書いて、ついにその場で死んでしもうたのじゃった。

六十九 「鷹狩^{ちやくし}の勅使」

〈原文〉

昔男ありけり。その男伊勢の国に狩りの使いにいけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「つねの使いよりは、この人よくいたはれ」といひやりければ、親のことなりければいとねむごろにいたはりけり。朝には狩りにいだしたててやり、夕さは帰りつつそこに来させけり。かくてねむごろにいたつきけり。

二日という夜、男われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど人目しげければえ逢はず。使ざねとある人なれば遠くも宿さず。女の聞^ね近くありければ女人をしづめて子^ねひとつばかりに男のもとに来たりけり。男はた寝られざりければ、外^との方を見出だして臥^ふせるに、月のおぼろなるに小さき童^{わらは}を先に立てて人立てり。おとこ、いとなしくて、ねすなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくてまちをれば、あけはなれてしばしあるに、女のもとより、ことばゝなくて、

きみやこし われやゆきけむ おもほえず 夢かうつゝか ねてかさめてか

おとこ、いといたうなきてよめる。

かきくらす心のやみにまどひにきゆめうつゝとはこよひさだめよとよみてやりて、かりにいでぬ。野にありけど心はそらにて、こよひだに人しづめて、いととくあはむとおもふに、くにのかみ、いつきの宮のかみかけたる、かりのつかひありときゝて、よひとよ、さけのみしければ、もはらあひ事もえせで、あけばおはりのくにへたちなむとすれば、おとも人しれずちのなみだをながせど、えあはず。夜やうやうあけなむとするほどに、女がたよりいだすさかづきのさらに、うたをかきていだしたり。とりて見れば、

かち人の わたれどぬれぬ えにしあれば

とかきて、すゑはなし。そのさか月のさらに、ついまつのすみして、うたのすゑをかきつぐ。

又あふさかのせきはこえなむとて、あくればおはりのくにへこえにけり。斎宮は水のおの御時。文徳天皇の御女、これたかのみこのいもうと。

〈意識〉

ある男が伊勢^{みこ}に鳥狩りの勅使として下向しなした。勅使ンお世話バする斎宮（伊勢神宮の最高の巫女）には、母バ通じてお京の方から「勅使の方^{ねんごろ}にゃ、懇ろにご優待申上げろソ」ちゅてお声掛かりじゃったけん、朝は朝で狩^{かりしたく}支度バ整え、夕は夕で国司の館にも泊めでにゃ、自分の住まいさん招えて、手厚うねぎろうておるうちに、どちらからともものういつん間にじゃい、お互いに思い合う仲にきゃーなった。

二日目ン晩、男が「ぜひ、今夜こそは語り合おうだネ」ちゅて、さそうた。女も、別に避^さくるわけじゃなかばって、何せ、人目あるもんじゃけん、逢うとも難儀じゃった。

男は、朝廷の正使じゃらしたけん、迎賓の正殿に、お泊りじゃった。女ン寢室は、すぐ近くじゃった。女は、皆が寢静まってから、子の一つ時（夜中の十二時頃）男ン所れ忍び込^こうた。男も寢付けでにゃおった。

横になって、ひょくっと外バ見れば、朧月に人影ン見ゆる。ゆうっと見れば女童（少女）バ先に立てて、その後ろにちいとる人ンおる。

男は、どもこも嬉しゅうなって寢室さね呼び寄せた。丑の三つ時（深夜三時過ぎ）まで一緒におったばって、まだ、何事も語りおうせんうちに、女は戻^{かえ}ってはって一た。

男はぽつんと取り残されたまま、残念やら、思え^{くや}ば悔まれてとうとう寢ず仕舞いで、夜が明けてしもうた。

翌朝、男は覚束なかまま、気掛かりでたまらんばって、相手ン身分が身分じゃけん、まさかこっちから消息するわけにもいかんし、居ても、起ってもおれん気持で、心もとのう思うとったりゃ、夜も明けて、いつときした頃、女ン許から上の句の歌だけ書^かけた手紙バ、使いに持たせてよこさした。

（昨夜は、あなたが私^{あわただし}ン方さんおいでたっじゃいろ、私が、貴方^{はかな}の方さね伺^{おう}ったっじゃいろ、それにしましても、何と慌^{あわ}しか、あまりにも夢^{うつつ}か逢瀬^{あうせ}じゃったこと。

こりゃ、一体夢^{うつつ}じゃい、現実^{うつつ}じゃい。いいや、眠^{うつつ}とったじゃろかい、正気^{うつつ}じゃったじゃろかい。とんと、私にゃ覚えがありまっせんと）

男は、そりバ見て、えっと泣き泣き、歌^{うた}ばしたためらした。

（夢か現かと貴女は仰るが、私っちゃ、昨夜のこた、何が何じゃい心が動転して闇夜に迷うとりますと。夢か現かは今夜もういっぺん逢うた上で、お決め下っせ。…今はとても返事どころじゃありません。今一度ぜひお逢いしたか）

男は、使いに歌バことづけて、狩に出掛けらした。

男は、鷹狩りの間も、心は上ン空で「昨夜は、どんこん慌しかった。せめて今夜どま、人が寝静まっとバ待って、少しでん早よう逢おう」て、思うとったりゃ、斎宮寮の長官が、勅使バ持て成す酒宴ば催してくれて、一晩中酒びたりじゃった。

いよいよ夜の明くれば尾張ン国さね行かんばんとに、気ばかり焦るばって、どがんもでけん。男も女も心ん中じゃ血の涙バ絞って泣ゃあとった。もう夜も白み掛けた頃、女が差し出ゃーた別れの盃に、上の句だけん歌ば添えてよこしなした。

（歩いて渡ったっちゃ濡れん浅か入り江…浅瀬じゃなかばって、貴方と私は、儚い一夜の契りしきゃこめん、極めて浅かご縁じゃった…是非にちめてお留め申すほどん関係でもなし、かと言うて、このままお別れすつともあんまりじゃとん、一体、どがんすればよかりいろ）

男は、間ものう出発の時間ちめて、ざわめいとるさ中、気持ゃ慌しかばって、道先案内人の持っとる松明^{たいまつ}の燃えさして、その盃ン裏に下の句の歌バ書ゃーて返盃した。

（再び、貴女にお逢いするちゅう名の逢う坂の関ば、超えてやって参りましょうだ。

そりが浅い縁であったっちゃ、縁がある以上、またお逢いできやすどもん。

お力落ししなすな）

こん斎宮は、清和天皇の御時の方で、文徳天皇の皇女にあたられるお方じゃんなしたちゅうたす。